住民が主人公のまちづくり・地域づくり

(合併して、なお自治の輝く町めざして 木曾町まちづくり条例と地域自治組織)

長野県木曾町前町長 田中勝巳氏

2014. 2. 22

はじめに

ご紹介頂きました田中です。去年11月26日、長野県木曾町の町長を退任いたしました。今日はふるさと鳩ヶ谷の会に要請を頂いてやってまいりました。『いやー、あの山の中の田舎町の町長の経験が、こんな大都市で役に立つのかな』と、近づくにつれ不安になって赤羽で電車を1台遅らせてやってまいりました。しかし、「ここまで来たら仕方ない」と、開き直ってここに来ました。つたない経験ですが話をさせていただきます。

木曾町のこと

長野県木曾町(2005年11月、木曾福島町、日義村、開田村、三岳村の4町村合併で出来た町)は長野県の南西部にあり、岐阜県高山市と接しています。

江戸時代には中山道で一番の要衝の町が木曾福島で、徳川の四大関所のひとつがありました。四大関所のなかでも一番重要視されたのが木曾福島の関所でした。というのは、江戸時代の参勤交代で、中京から南の藩はほとんど中山道を通って江戸に入りました。これは、東海道は川の流れによっては足止めを食らうことがあって予定が立たない。しかし、木曾・中山道はほとんど予定通り行けることから中山道を通りました。ですから、徳川が一番目を光らせたのが中山道でした。

木曾福島関所の代官は代々、徳川直系の旗本が務めました。後にはご三家の尾張に属しました。ですから、中央の文化が割と早く木曾には届いておったのです。

30歳で町議に

私はその木曾福島町で30年間、町会議員をやりました。30歳の時にお袋が倒れ、親父が毎日看護に行くので家が空っぽになる。私は長男でしたから、親父に泣かれてやむを得ず故郷に帰りました。

帰って1ヶ月後、町会議員選挙がありました。立候補する予定の人が交通事故を起こして選挙に出られなくなり、「街頭演説をやっていればいい」ということで、告示1週間前に無理やり引っぱり出されました。これは、新開村と福島町との合併でやった選挙

ですから、もう、大変な選挙でした。

うちの近くに立候補者がいて、私は地元推薦を破るような形で出たので、尾行がついていました。

選挙が終わって、選挙の責任者と私と、もともとの候補者の3人で「イヤー田中君、ご苦労だったナー、悪かったなー」と茶碗酒を飲んでいたら「当選した！」という知らせが入って、腰を抜かすほどビックリしました。私は、田舎の保守性が残っている新開村から出たので、(合併相手の)福島町の人が支持してくれたのだと思います。私の人生の中でそれ以上のサプライズはないのですが、ビリで町会議員に当選してしまいました。

それから8期連続で町議をやりました。

4期16年間町長に

町議8期目の途中で(当時のワンマンな現職町長に不満を持つ町民のみなさんに担ぎ出され)、木曾福島町の町長選挙に立候補しました。

この町長選挙では、告示されてからだんだん町民のみなさんが顔を出して話を聴いたり、拍手してくれるようになって、「これは当選するかもしれない」と思いました。「口に出して言うな」というので言いませんでしたが、投票日前日に「当選するかもしれない」と言ったら、「投票箱のふたが閉まる迄、候補者は先頭に立ってやれ」と叱られました。現職の町長と闘って、55%の得票で当選しました。

そうして、木曾福島で2期、4町村合併後の木曾町で2期、町長をやりました。今、76歳です。合併後の町長選挙で当選して、最初の議会で「私はこの次は出ませんから、町民のみなさん、後は頑張って下さい」と言いました。4年間、「次(の選挙には出ない)辞める」と言い続けました。次の町長選挙の半年ぐらい前、後援会の方から「町長は私たちが裏切っている」とすごく叱られました。私もビックリして聞きますと、その人は「あなたは町長になった時に『町民と共に命掛けで頑張ります』と言っただろう」と責められました。1ヶ月色々悩みましたが、立候補することになりました。今回は「やれ」と言われなくて辞められました。それでも、町民のみなさんから「元気なんだからもう1期やってもらいたかった」という話をたくさん頂きましたが、『惜しまれて辞めるのも、美学のひとつかな』と、辞めさせてもらいました。

村おこし運動に取り組む

余分なことを言ってきましたが、今日、鳩ヶ谷の会から「『宝探しの旅』と、『ふるさと地域協議会』のことに触れてもらいたい」と言われました。

この二つは、町会議員時代の話です。私が村おこし運動を地域のみなさんと一緒に始

めたのは、議員の4期目です。その頃私は、名実ともに地域の大ボス、地域の中心になっておった。今もそうですが、農村がどんどん衰退していく、人が減っていく、若者がみんな都市へ出て行ってしまうという状況の中で危機感に駆られ、「ふるさとを何とかしたい」と、村おこし運動を始めました。

私は、村おこし運動を手探りで、私の考えと信念に基づいてやりました。鳩ヶ谷は6万という大変な都市ですから、鳩ヶ谷と比べることはとてもできませんが、私が住む650戸程の黒川地域をまとめて『ふるさと地域協議会』を立ち上げ、その組織で、色々な村おこし運動をやりました。私も蕎麦の店を作って、町長になる直前まで、町会議員をやりながら蕎麦を打っていました。町長になるとやっている訳にゆきませんので、他の人に代ってもらいました。

◎宝探しの旅・・・地域の歴史が刻まれた石仏

『ふるさと地域協議会』の活動の中で私が一番感動したのは、自分の故郷に自信を持ってもらうために、「何の変哲もない、ただの田舎だけど、その良いところを自分たちで探して、それに磨きをかけて輝かしていくということが必要なんだ」と話して、ある日、30数人のおばちゃん達中心に弁当持ってバスに乗り、650戸程の地域をつぶさに見て回りました。

黒川地域は石仏が非常に多い地域で、(さまざまな石仏が1千体近くあります)。特に、双体道祖神という男女が手をつないでいる石仏ですね、安曇野を舞台にした(NHKの)朝ドラがありました。安曇野には双体道祖神はひとつです。安曇野のたった一つの道祖神の石仏がドラマで何回も出てくる。私の故郷は18もあります。ですから、私はうちの町が日本一の石仏の町だと思っていました。当時、大分のどこかが日本一の石仏の町と宣伝されていましたが、私は「うちはそれよりはるかに多い。これは、(地域の歴史が刻まれた)すごい貴重な石仏なんだ」と話して、見て回ったんです。

戻ってきて、皆で感想を述べあいました。石仏のそばに住んでおられるご婦人が、「私は隣村から嫁に来て20年になるけど、こんなすごい所に私の家があって、そこに住んでいるんだということを、今まで、一度も思ったことはなかった。木曾福島に近かったらどんなに良かったか、と思っていたが、こんなに素晴らしい所に住んでいるとは知らなかった」と言ってボロボロ泣いたんですね。これは、参加者を本当に感動させて、それぞれが、自分の故郷を見つめ直すきっかけになりました。

◎宝探しの旅・・・木曾らしい景観

また、古い、江戸時代の民家がたくさんあります。木曾地方6町村で、今でも、江戸時代の古い家並みがあるのはうちの町だけです。「この農村風景を残そう」ということも運動の中で行いました。ふるさとづくり協議会はいろんな活動をしますが、木曾地方全体の『村おこし運動』の先駆けになりました。

木曾福島町長としてやったこと

私は、最初の町会議員選挙ではビリでしたが、それ以後は5位を下ったことはありません。3期連続2位。ほとんど票は変わらない。「田中の票は鉄よりも固い」と言われました。広範な活動がそのように評価されたのではないかと考えています。私は、そうして町長になりました。

◎オウムとの闘い

平成10年3月に町長になって、最初にやったのがオウムに対する闘いを宣言したことです。

オウムは全国に18の拠点がありまして、木曽福島には(別荘を使った)オウムの“診療所”がありました。前町長は、外部に漏らさないようにやってきて、私たちはズッと後になって知らされました。その時、私は「オウムと闘うべきだ」と主張しましたが、議会も「秘密にしておこう」となり、町長選挙の直前まで黙っておりました。

町長選挙では「オウムと闘う」ことを方針にして戦い、勝ちました。選挙後に、私は「オウムと闘う」と宣言しました。全国にオウムの関係地域がありましたが、行政として正面から「オウムと闘う」と宣言したのは、うちの町が最初でした。半年くらいは私に続いて手を上げる自治体はなく、「木曽福島がどうなるか」と、見守っている状態でした。私も、「ヒョッとするとオウムに狙われるんじゃないか」と心配しましたが、しかし、それは町の闘い如何だろうと思って決意し、町をあげてオウムとの大闘争をやりました。半年過ぎたら視察に来る自治体があり、その自治体は、地元に戻って闘いを宣言しました。すると、半年くらいの間に次々と、日本中で「オウムと闘う」と宣言しました。そして、オウムはどんどん追い込まれ、やがて、「サリンや松本の事件もオウムがやった」と明らかになり、ますます、追い込まれていった訳です。

◎まちづくり総合計画を町民の手で

町長になって2年目にやったことは、町民自身が木曽福島町のまちづくり計画を作ることでした。『村おこし運動』は、町民が中心にならないとまちづくり・地域づくりは絶対うまくゆかない、ということは私の議員時代の経験でした。ですから、木曽福島町のまちづくりも、町民自身がまちづくり計画を作らないとうまくゆかない、と思っていました。

どこの自治体もそうですが、市の総合計画は町民や市民の知らない所で作られている。市役所が作ればまだいいんですが、市役所どころかコンサルタント会社がつけている。そして、市役所に持ち込んで、それが議会で承認される。ほとんどそうです。うちの町でもそういう風にして作られていました。

ですから私は、「まちづくり計画、町の総合計画を町民の手で作り直そう」と、提案しました。そして、「まちづくり計画に参加する人は手を上げて下さい」と、言いましたら、96人が手を上げたんですね。7000人の人口の内の96人ですから大変な数です。ところが、96人集まったら、チットも話がまとまらんのです。まァ、それは当

然ですが。それで、96人を3グループに分けました。「各グループで1年間、町を研究し討論して、1年後、皆さんの研究結果を報告して下さい」と、提案しました。そして、国土庁に“まちづくりアドバイザー制度”があったので、お願いして3人のアドバイザーを送ってもらいました。結構、面白い人を送っていただき、非常に力になりました。

この人たちが毎月来てグループの人と討論したり、タウンウォッチング＝町を見て回りました。町民がその人たちの発言を聞いて「うちの町に、こんなすごい所があるとは知らなかった」と、言いました。私が町議時代に黒川地域でやった、『宝さがしの旅』と一緒になんです。町の優れている所、素晴らしい所、行政がやった良いところ、それを全部洗い出してもらい、直すべき点、正すべきところもまとめてもらいました。1年後、それぞれに発表してもらい、これをもとに町の総合計画を作りました。

これが、木曾福島町長時代の最大の仕事でした。そして、町民から評価・支持されたのも、このことがあったからだと思います。

◎国が評価したまちづくり＝中心市街地活性化事業

また、町民のみなさんが寂しく思っているのが、関所があった時代の商店街がどんどんシャッター通りになっていくこと。これが切なく、心を痛めていることだという意見が、一番強く出されたんです。

それで、「中心市街地活性化計画を作ろう」ということになって、この計画も町民に手を上げてもらい、その人たちに作ってもらいました。その計画の中に、『中心市街地活性化事業』がありまして、全国766カ所で行われました。この事業は、商法を改正し、鳴り物入りで内閣の大きな事業としてやったんですが、後に通産省（当時）は「中心市街地活性化事業は失敗した」と、総括しました。その通産省が、うちの町に調査に来て「数少ない成功した町」として、木曾福島町を評価しました。

なんで成功したのかというと、『中心市街地活性化事業』で中心になるのが“タウン・マネジメント・カンパニー”という第3セクターのまちづくり会社を作って「民間の知恵を入れてまちづくりをやろう」というものでした。この会社をうちの町でも作るんですが、町が1500万円出資して町民から1450万円の出資金を集め、それでやる計画でした。ところが、町民から3500万円も集まったんです。資金の半分以上を町が出すことになっているので、あわてて、4500万円に増やして会社を作りました。「まちづくりをみんなでやろう」という町民の期待が、3500万円という出資金に表れたんですが、これで、通産省は「木曾福島はすごい」と、注目したんだと思います。

ふるさとまちづくり協議会もそうですが、木曾福島のまちづくりも、結局、町民が主人公になった時に初めて、出来たのです。

合併しても自治輝く町に

先頃の川口市長選挙の投票率が27%だったと聞いて、ビックリしました。これは、ほとんどの市民が市政から疎外されている、外されていることの現われだと、思います。

(木曾福島町長の1期目が終わる頃、全国に市町村合併の嵐が吹き荒れていました。国は平成10年以降、人口2000人以下の自治体への地方交付税を大幅に減らしたため、木曾福島町周辺の村も合併しないと行政がすすめられない状況になりました。そのため各町村から、木曾福島町に対し「合併してくれ」とさんざん請求してきました。田中勝己講演録より)

私は、町村合併に反対でしたが、やらざるを得なくなって、4町村の合併をやりました。その際、私が掲げたのがコミュニティです。アメリカの教育学者デューイの言葉で、私も感動してずっと使ってきたのですが、「面識社会＝顔を知り合う規模の社会が理想のコミュニティである」という言葉です。川口や鳩ヶ谷でそれを作るのは大変だと思いますが、それを作らなければ“市民が主人公の市”は作れません。

2期目の町長選挙の前に後援会に相談したら「お前の“合併反対”もわかるが、反対したら（選挙で勝つのは）大変だよ」と言われました。さんざん考え、悩みぬいて仲間内とも相談して出した結論は、①合併するかしないかは“住民投票”で決める。②合併したら、“合併してもなお、自治の輝くまち”を作る。この二つを掲げて町長選挙をやりました。町民は「田中は合併に反対していたようだが、どうも、合併反対ではなさそうだ」「それじゃあ、4年間の実績はすごくあるんだから、あいつにやってもらおうじゃねえか」と、推薦されました。相手は議会副議長でしたが、「合併」が選挙の争点ではなくなり、7対3で私が圧勝しました。

さて、合併を住民投票で決めるのは良いが、町民アンケートでは7割が合併賛成なので、住民投票をやれば「合併をやれ」が多数になるという見当はつきました。ですから、「“合併してもなお、自治の輝くまち”をどうやって作るのか、そんな町ってあるのか」と、本当に悩みました。それで、世界や日本のことを「学者になるんじゃないか」と思うくらい研究し、勉強しました。そこで得たものから田中流の方針を出しました。基本は、それこそ「住民が主人公」です。その「町政の主人公は住民」を貫くためには、「情報公開」が徹底されることです。

合併してできた木曾町は、「計画段階から情報公開する」という条例を作りました。大体、行政は計画段階では明かさないです。公開すると反対運動が起こるから公開しない。全部、段取りを作って、外堀を埋めてから公表する。行政のほとんどはそうです。でも、本当の民主主義は、「住民が主人公」だったら、計画段階から情報を公開して、市民の中で討論して、討論を通じてやるのが民主主義であり、一番のまちづくりではないか、と思います。

もう一つは、「行政内分権＝旧町村の地域に権限を下ろしていく」ことです。こういう立場で木曾町の「まちづくり条例」を作りました。

合併後も住民からの支持が・・・

一昨年、兵庫県篠山市長から「会いたいので時間を都合してほしい」と連絡があり、市役所に行きました。市の幹部も集まっていて、市長が開口一番「合併をすすめた首長で2期目も当選した人はほとんどいない。しかも、あなたは共産党なのに、なぜ当選できたのか」と言われました。私は、“まちづくり条例”と“住民が主人公”という町政を説明し、それを、合併後も続けていることが合併した旧町村の住民から評価されたんだろう、と話しました。

合併で木曾町が出来てから視察がどんどん来ますが、3団体一緒になる日もあります。

町内に3つの研究所つくる

合併後の木曾町は、長野県内でも注目され、「変わり者の町長」と首長仲間からも思われています。やっていることも変わっています。一番は、木曾町には研究所が3つあることです。

木曾福島の時代に『木曾学研究所』＝人を作ろう、育てようという研究所を作りました。木曾町になってから『地域資源研究所』＝木曾町にある資源を育てて地域のものにする研究所です。実は、木曾福島に「すんき」という伝統食物＝乳酸菌で漬けた漬物があります。乳酸菌の漬物は世界にも、勿論日本にも例がない、特別な漬物です。こういう乳酸菌を使った食品開発が出来ないか、とずっと前から思っていたので、『地域資源研究所』を作りました。ここで、天然酵母を集めて、5000株集まりました。その中から8種類取り出して、特許の出願をしました。今年は、2種類のお酒を造れることとなります。日本酒の酵母は15から18種類程です。それくらい少ない。天然の酵母で造った日本酒は2つしかない。福島県に一つと東京農大が発見したもの。それだけですが、うちの町で3つも見つけました。今年、これで2種類の酒を造りました。家は、どぶろくの特許を取っているので、その酵母を使ってどぶろくを造ってみました。結構、フルーティな香りがするんですが、もうちょっと作り方を研究、改良しないとだめです。

ずっと、田舎で暮らせる社会づくりを

国の国土審議会に『長期展望委員会』という、50年後100年後の日本を展望して“地域づくりをどうすすめるか”ということの研究する機関があります。ここが、「50年後の日本」という分厚い報告書を22年3月に発表しました。

50年後、日本の人口や農村、気候がどうなっているかですね。南氷洋の氷が解けて海水面が5メートル上がり、埼玉県のずっと奥まで水浸しになるという話です。また、木曾郡は、北海道や東北、中国四国、九州地方と一緒に、大変な過疎地帯になる。今で

も少ないが、現在人が住む居住地の2割が無居住化すると予測されている。都市部にほとんどの人が集まって、日本の人口は100年後には3700万人になると書いてある。江戸時代の最後は、3300万人でしたからその時より400万人多いだけです。いま国会で都市再生特別措置法(?)が審議されています。これはコンパクトシティ論の法制化を含んでいます。「田舎に人が住むと経費がかかる。都市に人を集めて安上がりな町づくりをめざす」と言うもので、私は亡国の理論だと思います。この道が、3700万の道です。人が住んで、暮らして、はじめて国土は維持できる。

日本がすすんでいる道は、100年後を考えたとしても生きていけない。目先のことだけ。安倍さんのやっていることがそれです。田舎がなくなれば、報告書の予想通りにいったら本当に日本はダメになると思います。ですから、一極集中のような国づくり、日本のあり方を改め、中山間地を含めた田舎で暮らせる社会を作らないと。そういう時に頑張れる地域を作らなければ、とっております。

町長を退任した時、「町長辞めたら、奥さんと一緒に船で世界一周の旅に出たら」などと職員に言われましたが、そんなことはとても無理だなと。私は23歳の時に共産党に入り、それからこの道を歩いてきました。町長を辞めたからと横道を歩くわけにはいかないと思い、社団法人を作ろうと準備しています。世の中に役にたつ生き方をしたい。これからも

そういうことをやっていきたいと思っています。

時間が来てしまったので、これでお開きにさせていただきます。

＝ 質問に答えて ＝

質問→ 町長時代、国とか県からの指導とか、圧力はどうだったか。

答え→ 初めて木曾福島の町長になったころ、少しはありました。県の部長達から酒の席では結構あったが、正面切っては何もなかった。その時だけで、あとは、何もありませんでした。

質問→ 若者たちの町政への参加はどんな形だったでしょうか。

答え→ 私が若い頃は集まったが、年寄りになるにつれ、集まるのも年寄りに。近年は若者がいなくなったこともあるけど、年寄りの方が多い。まちづくり会社には、ボランティアで若者も多く来ていました。ですから、プログラムプロジェクトには若者も集まってきています。

質問→ まちづくりの時の自治会と行政との関係はどうだったか。

答え→ 自治会は、行政のお手伝いと地元の利益を代表する二つの側面がありますが、それは、木曾町でも変わりません。ただ、木曾町は、合併した旧四町村ごとに『地域自治組織』を作りました。そこに自治会も一構成団体として参加しています。(参加して

いない自治会もあります。)この『地域自治組織』は全くの“自主的組織”と位置づけています。全国には、合併した自治体を中心に260位の地域自治組織が作られていますが、多くは諮問機関です。木曾町は全国に例のない独自の“自治組織”です。

ですから一昨年、町が総合コミュニティーセンターを作ると発表したら、日義地域の『自治組織』が先頭に立って反対運動を起し、町民アンケートをとったら反対が多数で、町長の私が白旗を上げました。議会から、「町長が『地域自治組織』なんて作るから、自分で自分の首を絞めることになった」と言われましたが、私は「それで良かった」と思っています。私は「町原案は白紙に戻します。皆さんでどうしたらいいかを考えて下さい」と提案し、「それを考えてくれる人は、手をあげて下さい」と呼びかけました。64人が手を上げて検討委員会を作り、会長には反対運動の先頭に立った人になりました。1年検討して出されたものは、町が提案したものとだいたい同じでした。でも、「皆さんの心がこもっているだけ素晴らしいもので、一年間延びたけど、非常に良い結果になったと思っています」と答え、お礼を申し上げました。

質問→ 『いのちの交通』について聞きたいのですが

答え→ 木曾町の交通システムについて私が『いのちの交通網』と言ったら、朝日新聞1面に大きく書かれ、全国からワーストと視察に来られました。

4町村合併で木曾町は広大な面積になります。中でも一番遠い開田村から木曾福島まで、バス代が1560円かかります。高校、役所、病院、みんな木曾福島にあります。学校にも、病院にも一番足の弱い人がバスを利用する。バス以外ないのです。「一つの町になるならこれを何とかしてくれ」と、町民から声があがったので、合併協議会の中に交通政策検討委員会を作りました。この検討の中で、担当職員が「国交省の役人をこの委員会に参加してもらって制度があるけど、どうだろうか」と、言ってきました。「計画段階から役人を入れても役に立たないだろうが、まア、害にはならんだろう」と、申請しました。そうしたら、新潟県にある北陸信越地方整備局から役人が来てくれ、その役人が「地域の足を確保するために、赤字になった場合、その8割を国が特別交付税で補填するという省令(省の都合でいつでも変えられる法令のひとつ)がある」と言うんです。私は全然、知らなかったのでビックリして調べたら、『都市部の一部の地域から声が出て、その省令を作ったけれども、中山間部の田舎に適用した例はない』ということでした。申請すれば何とかかなると言うので、対策委員会はそれを前提に、幹線バス・循環バス・デマンドタクシーを組み合わせた交通システムを計画し、申請しました。

交通システムは、合併時から稼動し、どこへでも片道200円で乗れます。70歳以上のお年寄りは定期券が1ヶ月800円です。1日に2回、バスに乗るお年寄りがいて、朝、農産物を持って出てきて一旦帰り、夕方、またバスに乗ってスーパーで買い物をして帰る、というように。木曾地方のお年寄りは、話し相手がないものだから木曾福島に出てくる。そういうお年寄りが結構いまして、(この交通システムは)喜ばれています。今、

料金収入は2500万円位で、国からの特別交付金が1億1000万円来ます。長野県でも特別交付税が突出して多いので、「何で、共産党の田中の所にそんなに特別交付金に来るんだ」と、声がありました。

私は（始める時に）「これは5年位は持つかもしれないが、それ以上はダメかな」と言いました。皆さんが「5年でもいいから」と言われるので、「保証は出来ないけれど国が措置してくれる内は頑張る」と言ってきましたが、現在で8年になりました。これは農山村を中心に過疎化が進行し、足の問題が民間交通機関に任しておけなくなった背景があると思います。

（文責＝ふるさと鳩ヶ谷の会 事務局）